



2008年1月25日

学習院大学長 福井憲彦 様

社団法人 日本建築家協会 (JIA)
関東甲信越支部 支部長 伊平則夫
同 保存問題委員会 委員長 川上恵一
同 城北地域会 代表 松本哲夫



学習院大学ピラミッド校舎と校舎群の保存活用に関する要望書

拝啓 時下ますますご清祥のこととお慶び申し上げます。

貴校におかれましては、日頃より歴史的建造物の継承に理解を示されていることに深く敬意を表します。また、当協会の活動には特別なご理解とご支援を賜り厚く御礼申し上げます。

この度貴校はピラミッド校舎（中央教室）を解体し、地下1階、地上11階建ての中央教育研究棟（仮称）を建設すると公表されました。

ご高承のように、建築家前川國男設計による貴学習院大学の校舎群は、当時の学長安倍能成氏が、新たにつくるキャンパスの計画にあたり、「建築は現代の科学と芸術の成果を顕現する」という考えから、前川國男に協力を求め実現したものです。

前川國男（1905-1986）は、20世紀を代表する建築家ル・コルビュジェに学び、帰国後、半世紀にわたって活動を続けた日本を代表する建築家です。

キャンパスを計画するにあたり前川國男は、「学問の自由と社会奉仕という、大学本来の機能を通して建物の中に真の大学らしさ」を生み出そうと腐心し、1960年、既存校舎と新しく建てる校舎群との調和を図りながら、キャンパスの中に人々を包み込むコア（広場）をつくり出しました。その中心に建つのが四角錐型の大教室、本ピラミッド校舎です。このピラミッド型の形態が、周辺の環境に光を導き入れ、開放感を与えることとなり、広場と大教室を取り囲む校舎群が、一階部分に設けられた回廊を通してつながることにより、コア（広場）を中心として学生たちが本キャンパスに集う意識を再認識させることとなりました。それこそが前川國男が目指したものでした。

このコア（広場）をテーマとし、キャンパスの地形を活かして様々な校舎群を構築し、既存校舎との融合を目指して構成されたキャンパス計画は、戦後の復興を目指していた1950年代の日本においては画期的なものでした。建てられてから47年を経た現在、キャンパス計画上の意義はもとより、建築の群として構成される都市を考察する上でも今なお意味を持ち、都市としての学習院大学キャンパスの統合を示す上で、このピラミッド校舎は、欠かすことのできない大きな存在です。

この大教室は、独特な形態により「ピラ校」という愛称で親しまれる学習院大学のシンボルになりました。現在もこの校舎を背にして大勢の学生が記念写真を撮ると聞いています。また同窓生にとっては、数多くの恩師や旧友、先輩や後輩との交流によって培われた独自の校風が思い起こされる大切な記憶装置になっています。

以上のように、学習院大学ピラミッド校舎は、同窓生の「心のコア」であると同時に、現代のキャンパス構成を考察する上でも示唆を与えてくれる貴重な文化的遺産です。このピラミッド校舎、及びそれと一体で構築された校舎群に対しても、歴史的建造物としての既存校舎とあわせ保全措置を施し、後世へとその価値を継承されることを今一度ご検討くださいますようお願い申し上げます。

なお、社団法人日本建築家協会関東甲信越支部、同保存問題委員会、及び同城北地域会は、できる限りのご協力をさせていただくことを申し添えます。

敬具